

# 天保十四年の キャリーオーバー

五十嵐貴久

## 第二回

五

\* \* \*

富籤とみくじの歴史は古い。

紀元前一八〇年前後、漢の張良ちやうりやうが万里の長城建設に当たり、資金を富籤の販売によって集めたのが、その始まりと言われている。

古代ローマでもジュリアス・シーザーが富籤を販売し、その利益を市街地の再開発に充てたとされるが、一獲千金いつかくせんぎんの夢がかなうという意味で、古来より洋の東西を問わず庶民からの人気が高かったのである。

日本においては平安期に賭博とばくの一種として始まり、その後上方かみがたを中心に富籤興行が行われていたが、盛んになったのは江戸時代に

入ってからであった。

もともと富籤は賭博行為であり、現在の法律でも富籤（宝くじ）は賭博に分類されている。平安期以降も、時の為政者は富籤を博打と規定し、富籤興行を禁止していた。

徳川家康が幕府を開いてからもそれは同じで、三代將軍家光の治世期、宝永年間ほうえいに京都で行われた富籤興行が罰せられ、また元禄げんろく五年（一六九二）の町触まちぶれには、富籤禁止の条文が出された。町触れとは町人に対する法令である。

だが、五代將軍綱吉の頃から、幕府の財政は傾き始めていた。仏教に深く帰依きえしていた家康は宗派にかかわらず寺社を保護し、寺領じりょうを与えており、古刹こせつの修理、修復も幕府が援助していたが、それが困難になったため、寺社の側も自衛策を講じなければならなかった。多くの寺社から、富籤興行の収益で建物や本尊の修復を行ないたいという請願が起こったのはそのためである。

享保十五年（一七三〇）、八代將軍徳川吉宗は寺社を勧進元かんじんもととした富籤興行の認可の検討を幕閣ぼくかくに命じた。幕府の財政難はそこまで深刻な状態に陥っていたのである。

同年、仁和寺にんなじ門跡修復の名目による富籤興行を護国寺ごこくじで開いたところ、それまで禁止されていたこともあり、庶民の間で爆発的な人気を呼ぶこととなった。護国寺側も幕府に対し、富籤興行の収益か

ら冥加金（税金）を支払ったため、大きな収入があったことから、幕府は全国の寺社に対し、寺社奉行管轄の下、富籤興行の開催を許可するようになる。

ただし、富籤興行には多くの制約があった。富札の販売を寺社内に限るとしたのも、そのひとつである。

現在のように、宝くじ販売所が至るところにあるわけではない。富札を購入するためには、富籤興行が開かれる寺まで出向かなければならなかった。

現代に置き換えて言えば、護国寺は東京都文京区大塚にある。仮に新宿に住んでいる者が富籤を買うとすると、一時間以上かけて約五キロ（一里強）を歩かなければならない。もし、八王子から行くとなると、三十九キロ（約十里）、八時間の道程である。

しかも、富籤の当選発表は寺社境内で行なわれ、当選者は寺社内にいなければならないという規則もあった。購入時、当選者発表時の二回、寺まで足を運ばなければならないのは、庶民にとって大きな負担である。そのために生まれたのが「陰富」だった。

陰富とは、現在で言うノミ賭博である。実際に寺社で富籤興行が開かれる際、それに合わせて胴元どうもとが非合法の富札を私的に販売し、購入者は自分が選んだ富札の番号と枚数を胴元に伝え、その金額を支払うという単純なシステムであった。

いちいち寺社へ行かずとも、富札の番号を言って購入金額を支払えば、それですべて済むという利便性が受け、正式な富札の販売額より陰富に投じられる金額の方が遥かに多くなったほどである。

胴元の側も、自ら賭場を開く必要がなく、実際の富籤興行の当り札に合わせて当選者に賞金を支払うだけでいい。稼働人数もごく少数で済むので、これほど利益率の高い博奕ばくちはなかった。

現代において宝くじの当選確率は、例えば年末ジャンボ宝くじの場合、販売枚数六億五千万枚、一億円が当たる一等は百三十二本、つまり約五百万分の一である。単純に江戸時代の富籤と比較することはできないが、当選確率が異常なまでに低いのは同じである。胴元にとって、損金が出るリスクはほぼなかった。

当初、胴元となるのは地回りのヤクザが主だったが、後には歴れつきとした武士が陰富を手掛けるようになり、ついには御三家ごさんけのひとつである水戸藩みとまでが、藩ぐるみで陰富興行を運営していたほどである(この事実を知り、水戸藩を強請ゆすつたのが有名な悪僧、河内山宗春こうちやまそうしゆんである。この事件は河竹黙阿弥かわたけもくあみが明治十四年(一八八一)、歌舞伎の演目として書き下ろすこととなる)。

富籤は幕府が認可する公営ギャンブルだが、陰富は違法である。寺社奉行が管轄する公認の富籤興行は、勸進元の寺社から冥加金を徴収できるが、陰富の胴元が幕府に税金を納めるはずもない。陰富

の方が人気が高いというのでは、何のために富籤興行を認可しているのかわからない。

そのため、幕府は町奉行に胴元の摘発を命じたが、捕まるのは末端のヤクザ者だけで、胴元にまでは手が届かないのが実情であった。今も昔も、本当の悪人は手を汚さないものなのである。

\* \* \*

おめえが言いたいのは、と團十郎だんじゅうろうは口元を拭った。

「鳥居とりいの野郎が陰富の胴元つるまつってことか」

そうですねつるまつうなずいた鶴松に、馬鹿なことを言いやがる、とこめかみを人差し指で叩いた。

「おつむは大丈夫か？ 奴は町奉行まちぶぎょうだぞ。陰富の胴元を捕らえるのがあの男の仕事だ。そんな野郎が陰富を仕切ってるなんて、あるはずないだろうが」

だからあの男は町奉行にならなければならなかったのです、と鶴松が落ち着いた表情で言った。

「七代目の言うように、鳥居は陰富を取り締まる立場にいます。ですが、江戸の町で陰富を行なっているヤクザ者は何百、何千といろでしょう。誰に目をつけ、誰を調べ、誰をお縄にするかは町奉行の腹ひとつ。自らが行なっている陰富を、自らが取り調べることなど

あり得ません。絶対に安全な立場で陰富を仕切るためには、町奉行になるのが一番なのです」

理屈はわかる、と團十郎は足を投げ出した。

「しかし、そんな汚ねえ話があるか？ 武士の風上にも置けねえ。

武士どころか、人として屑くず以下じゃねえか」

鳥居とはそういう男です、と鶴松が言った。隣りに座っていたお葉はなが深くうなずいている。

「つまり、鳥居の野郎はてめえの私腹を肥やすために町奉行になった。そのためには、おめえの養父おやしが邪魔だった。だから濡れ衣を着せて追い落とした。そういう筋書きか？」

単純に言えばそうなります、と鶴松が懐から取り出した帳面を開いた。

「養父定謙さだのりの調べでは、鳥居が陰富に手を出すようになったのは、およそ十年前です。当時、鳥居は先の將軍家斉いえなり様の側近として仕えていましたが、その後異例の出世を遂げています。あの男にそれだけの実力、学問、識見があったのは認めざるを得ませんが、それにしても昇進が早すぎます。天保五年（一八三四）、中奥なかおくから徒頭かちがしらに上がり、二年後の天保七年（一八三六）には江戸城西の丸目付めつけ、翌々年には目付に昇進、更に勝手掛かかってがかりも兼任しています。そして天保十二年（一八四一）には養父を讒言ざんげんによって陥れ、空いた江戸南町奉行

に就き、おまけに従五位甲斐守に叙任されているんです。まともに考えたら、あり得ないことでしょう」

出世のためにこいつを使ったか、と團十郎は指で丸を作った。間違いない、と鶴松がうなずいた。

「世の中、きれいごとだけでは渡っていきませんからね。去年まで老中頭だった水野忠邦、そして幕閣がこぞって鳥居を押し立てたのは、賄賂のためです」

幕府は腐ってやがるなあ、と團十郎は総髪を掻いた。

「地獄の沙汰も金次第、賄賂を掴ませられりゃあ、妖怪でも化け物でも町奉行に取り立てるってわけだ」

「鳥居は幕府の儒学者、林家の三男です」二十五歳の時、旗本の鳥居家の養子になっています、と鶴松が帳面をめくった。「鳥居家は二千五百石取りの大身ですが、それなりに容儀も整えなければなりません。多くの旗本が借金だらけなのは、七代目もご存じでしょう。鳥居が賄賂のための大金を用意するには、陰富に手を出すしかなかったと養父は考えていました。その後、わたしも調べています。間違いないありません」

他に手はなかっただろうな、と團十郎は大きな顔を振った。

「だが、今さら遅えよ。鳥居は町奉行になっちまった。陰富を取り締まる立場にある者が、てめえで陰富の胴元をやっているとしたりや

あ、訴えたってどうにもならねえだろう。誰が南町奉行をお縄にするのと？ 將軍様だつてできるかどうか、怪しいもんだ」

江戸幕府には奉行と名のつく職が多い。主なものだけでも、寺社奉行、勘定奉行、道中奉行、遠国奉行、作事奉行、普請奉行などがあり、小さな役職まで含めると、数え切れないほどである。

その中でも町奉行は寺社奉行、勘定奉行と並び、三奉行を称されている重要な役職であった。寺社奉行は譜代大名から任命されるのが通例であったため、格こそ上だったが、実際には行政、司法担当の町奉行、財政担当官の勘定奉行の方が立場として重く、特に町奉行は旗本が就く役職として最高位だった。

行政、司法の最高責任者であるため、將軍でさえ迂闊に手を出せないというのも、決して大袈裟な話ではない。

「評定所に訴え出たところで、町奉行が中心になっているのは誰でも知ってる。相手にもされねえだろうよ」

幕府評定所は江戸城外の辰の口にあり、幕府の重要事項や大名、旗本の詮議を司る機関である。町奉行、寺社奉行、勘定奉行と老中一名、加えて大目付と目付によって構成されるが、最も権限が強いのは町奉行であった。

「それとも、將軍様に直訴でもするか？」馬鹿馬鹿しい、と團十郎は大きな口を曲げた。「そんなことをしたって、取り押さえられるだ



けだし、それどころかその場で首を刎ねられるだろう。鳥居に勝てる目はねえんだ。おれの気持ちがあわかっただろう？ 奴を殺すしか、できることはねえんだよ」

意味がないと言ったはずですが、と鶴松が立ち上がった。

「あの男を殺したところで、養父の無念は晴れません。七代目にしたって同じでしょう。舞台に立つてこそその市川團十郎です。小塚原刑場の露となったところで、誰も喜びませんよ」

いったいどうするつもりだ、と團十郎は鶴松を見上げた。

「おめえは何をしようっていうんだ？ 何を企んでいやがる？」

出ませんか、と鶴松が微笑んだ。沁みるような笑顔である。腹が立つほどいい男だとつぶやいて、團十郎は鼻をすすった。

## 六

表に出ると、空に厚い雲がかかっていた。

何時だと尋ねると、酉の刻です、と鶴松が答えた。

奉行所で鳥居を襲う寸前、鶴松に止められたのが一刻前（二時間前）だから、気を失っていたのはそれほど長い時間ではなかったのだろう。

陽が暮れかけている。寒いな、と團十郎は懐に手を突っ込んだ。



「糞がつくほど真面目で、吉原どころか、岡場所に上がったこともありません。どちらかと言えば人嫌いで、養子に取ったわたしの相手もせず、本ばかり読んでいました」

そんな人が謀反むほんを考えるはずもないでしょう、と林の中を素早く歩きながら、鶴松がため息をついた。

「わたしから見ても、よくわからない人でした。上とも下とも連つるもうとせず、ただひたすら奉行としての職務に専念するだけです。ひとつ間違えれば世捨て人になっていたかもしれません。そんな人だから、鳥居の汚い策にあっさり引っ掛かったのです。養父の悪い噂が流れているのは本当ですが、すべて鳥居が広めていることです。知恵の廻る男ですよ。噂を打ち消すのは、大火事を消すより難しいですからね」

鳥居にしてやられたのは誰だってわかってる、と團十郎は足元の小石を蹴った。

「あることないこと濡れ衣を着せられて、奉行の職を奪われたと聞いた。だがな、おめえの親父が間抜けだったんじゃないか？ 町奉行だったんだから、やり様はいくらでもあっただろう。早い話、老中なり幕府のお偉方に賄賂を渡せば良かったんだ。自分は何もしていない、大塩の乱に係わりあいはないといくら言ったところで、ごまめの齒軋はぎしりにもなりやしねえよ。そんなこともわからなかったの

か？」

わからなかったんでしよう、と鶴松がまたため息をついた。

「わたしは養父が無実だと知っていました。公金を流用して吉原の太夫たゆうにつき込んだとか、大塩の乱に加担したとか、そんなことができる人ではありません。気が小さく、真面目だけが取り柄のような人でしたからね」

だが、死にしまったものはどうにもならねえ、と團十郎は口を尖らせた。

「何をしたって、生き返りやしねえからな……それはいいが、おめえは何をしようと考えてるんだ？ さっさと教えろ、おれは寒いのが大嫌えなんだ。こんな話をするために、外へ連れ出したわけじゃねえんだろ？」

「養父が遺した書状を元に、わたしも調べました」

鳥居が陰富の胴元をしているのは間違いありません、と鶴松が足を止めた。ぼつぼつと雨が降り出していたが、杉の木が立ち並び、枝葉が雨を遮っているので、濡れることはなかった。

「養父は真面目一点張りの男でしたが、鳥居が良からぬことを企んでいるのに気づかないほど、間抜けでもありませんでした。証拠を集め、鳥居が陰富の胴元だと訴え出る寸前だったのです。ただ、鳥居の動きの方が早かったので、それには失敗しましたが」

「奉行が陰富をしていたとわかりやあ、さすがにまずいだろう。だが、証拠はねえんだろ？ おめえの話じゃ、親父さんがお縄にかかった時、家捜しをして一切合財持っていったってことだ。そうじゃなかったか？ おめえが書状やら書き付けやらを読んで、全部覚えていると言い張ったって、何の証拠もない言い掛かりだと鳥居は突っ張ねるだろうよ」

そうでしょうね、とどこか他人事のように鶴松が言った。

「もうひとつ言えば、養父は鳥居が使っていた賄賂の金額を調べ、あまりにも巨額だったために、陰富をしていたと考えただけで、現場を確かめたわけではありません。すべては憶測に過ぎないんです。もっとも、鳥居が胴元を務めていたという養父の結論は正しい、とわたしはわかっていますが」

「どうして言い切れる？ もう少しわかりやすく話してくれねえか」  
難しいことではありません、と屈かがんだ鶴松が落ちていた木の枝を手を取った。

「養父が調べていたのは、鳥居が老中たちに渡していた賄賂の流れです。仕事はできる人でしたから、丁寧に調べ上げていました。この十年で、およそ二十万両です。二千五百石取りの旗本が、そんな金を持っているはずありません。では、どうやって賄賂を用意したのか？」

講談みてえだ、と團十郎はうなずいた。鳥居の出世してきた道を逆に辿っていけば、答えはすぐに出ますと鶴松が言った。

「あの男は自分の立場を利用して、陰富の胴元になったのです。その辺の地回りのヤクザとは違い、誰でも客にするというやり方ではありませんでした。選びに選び抜いた者だけを客とし、大金が動く賭場を作ったのです。目の付け所が並ではありません。あれだけ頭の鋭い男はいないでしょう」

「客というのは？」

まず水野忠邦、と鶴松が木の枝で地面に名前を書いた。

「譜代大名、外様大名、とびま大身の旗本、御家人。あの男が選んだのは、身分のある武士だけです。養父の遺した書状によれば、その数は十人前後、皆口の堅い者ばかり。己が南町奉行になってからは、富裕な町民、僧侶なども加えています。胴元である鳥居の許しがないと、賭場に入ることはできません。だから、秘密が漏れないのです」

大名とは恐れ入谷の鬼子母神、と團十郎は唾を吐いた。

「信じられねえな。そりゃあ、旗本と大名は將軍直参が適う身だから、立場は同じだ。江戸の町に限っていえば、鳥居の方が上かもしれねえ。それにしたって、大名を従えて陰富つてのは……」

言葉巧みに誘い込み、最初は少額の金子を賭けさせる、と鶴松が

手の中の小枝を折った。

「賭場では酒や山海の珍味はもちろん、女も最高の芸妓げいぎを揃えてもてなしますから、次に誘えば断わる者はいません。ですが、陰富は博奕です。大名や大身の旗本など、金に不自由してない者しか出入りしていませんから、一両二両で済むはずもないのはわかるでしょう。放っておいても、賭け金は上がっていきます。誰かが十両と言えば二十両、百両と言えば二百両となる。鳥居は人の心を操る妖怪です。赤子の手を捻ひねるも同然だったでしょう」

「百両？」そんな無茶な話があるか、と團十郎は杉の木を蹴った。「陰富に百両賭ける馬鹿はいねえよ。聞いたこともねえ」

客層を考えてください、と鶴松が木の枝を捨てた。

「老中や大名が加わっているんです。町人が買う富籤はしがねは一枚二朱が相場ですが、大名や大身の旗本がそんな端金はしがねで満足するはずもありません。百両二百両どころか、千両賭けている者もいるようです」

信じられねえ、と團十郎は首を振った。

「おめえ、江戸でどれだけ富籤興行が開かれているか、知ってるのか？ 一時ひとときより減ったとはいえ、月に十回は下らねえ。そのたびに陰富をしていたら、年に百回以上で、毎回千両賭けていたら、ええと——」

十万両です、と鶴松が微笑んだ。

「何年も十万両の損を出していたら、百万石の大名でも身代を潰すでしょう。ですが、鳥居もそこは考えています。あの男が取る寺銭てらせんは賭け金全体の一割、それだけです。ヤクザの胴元なら二割五分は抜きますから、どれだけ安いかわかるでしょう」

「それにしたって……」

他にも様々な救済措置があります、と鶴松がうなずいた。

「本来の富籤興行であれば、二朱で富札を買っても、外れたらそれまでです。一文も戻ってきません。ですが、鳥居は賭け金の四分の一を当たり外れにかかわらず返金します。千両賭けても、二百五十両は戻ってくるんです」

「そうは言うが、当たらなきゃどうなる？ その金は誰の懐に入る？」

誰の懐にも入りません、と鶴松が首を振った。

「すべてを鳥居が取り置いているのです。いいですか、金の流れはこうです。一人が百両で陰富の富札を買ったとしましょう。すぐに鳥居は二十五両を戻します。そして、残った七十五両から寺銭の十両を引いた六十五両を預かり金とするのです。賄賂あに充てているのは、すべて寺銭です」

賄賂の出所はわかった、と團十郎は杉の幹で背中を支えた。

「そうじゃなくて、鳥居が取り置いている金はどうなるんだと聞い



てるんだ」

籤が当たった時の支払いに使いますと言った鶴松に、そんなわけねえだろうと團十郎は大きな鼻に触れた。

「俺だって富籤ぐらいやったことがある。寺によって違いはあるが、百回富箱を突いて、当たり籤は十枚つてところだろう。賞金が一番高いのは一番籤と留め籤で、百倍返しが仕来りだ。千両賭けてたら、十万両だぞ？ それに、一番籤や留め籤だけが当たり籤じゃねえ。普通は十番ごとに当たりを出す。留め籤の前の九十九番籤、後の百一番籤も賞金が出るし、他にも細々（小遣）当たりが出るようになってる。もし全部当たったら、鳥居が払い戻す金額はとんでもねえことになるじゃねえか」

十年です、と鶴松が手についた泥を払った。

「この十年で、鳥居が預かり金にした総額は百万両以上でしょう。もし千両で陰富の札を買った者が留め籤の当たりを引いたとしても、十万両を支払うことなど、鳥居にとっては痛くも痒くもないのです」  
そもそも富籤なんて当たりっこねえからな、と團十郎は腕を組んだ。そうです、と鶴松が大きくなずいた。

「一番籤と留め籤こそ百倍返しですが、他の当たり籤は五倍、多くても十倍返しが定法です。千両で一枚だけ陰富の籤を買うような客は鳥居の賭場にいません。最低でも一万両は使います。一度の陰富

で、十人の客がいれば十万両が積まれるのです。万一、最高額の留め簀が当たったとしても、その場にある金で支払えます。考えてみてください、寺社が売っている富札は一万枚以上です。一万分の一が当たる者がどれだけいると思います？ 十年続けて、一人いればいい方でしょう。あの男の頭の良さは、それに気づいたことです」

一度でも鳥居の陰富に加わった者は、誰にも口外できなくなる、と團十郎は腕を組んだ。

「何しろ陰富ははつとご法度だからな。鳥居にとっては一石二鳥、大金を絞り取った上で、弱みを握ることが出来る仕掛けを作ったというわけだ」

察しが早くて助かります、と鶴松が満足そうにうなずいた。偉くなる奴は違うな、と團十郎はため息をついた。

「感心するしかねえよ。おお、寒い。息が真っ白だ。話はわかった。俺の料簡りょうけん違いだった。あんな化け物を殺せるはずもねえ。じゃあな、俺はこのまま消えるぜ」

待ってください、と鶴松が團十郎の二の腕を掴んだ。

「まだ話は終わっていません。確かに鳥居は江戸隋一の権勢を誇る実力者となりました。鳥居を引き立て、今の地位に就けた老中の水野忠邦を裏切り、現老中頭の土井利位どいとつち様に寝返ってからは、誰に遠慮することもなく、思うがままに振る舞っています、七代目はあ

の男を許しておけますか」

許せねえさ、と團十郎は吐き捨てた。

「俺から芝居を奪った男だぞ？ 命より大事なものを盗られて、黙って引つ込むような男に見えるか？ だがな、おめえの話を聞いてつくづくわかった。俺がどうこうできる相手じゃねえってな。おめえ、博奕はするか？」

しません、と鶴松が首を振った。俺はやる、と團十郎は手のひらを横に振った。

「これでもそこそこ強い方だが、それには訳がある。勝ち目のない賽は振らねえと決めてるんだ。負けるとわかったら、三十六計逃げるにしかずよ。鳥居に勝てるはずがねえ。だから俺は逃げる。おめえには命を救ってもらったことになるな。借りはいつか返すから、気長に待っててくれ」

待てません、と鶴松が掴んでいた腕に力を込めた。

「鳥居を見張っていたのは、あなただけではありません。あの男に恨みを持つ者は、あなたが思っているより大勢いるのです。この一年、わたしたちは鳥居のことを細大漏らさず調べ続けていました。今話したより、ずっと多くのことを知っています。これから何を、どうすればいいのかも」

「何をどうしようっていうんだ？」

ひとつだけ、最後の駒が足りませんでした、と鶴松が顔を近づけた。

「どうするか思案していたわたしの前に、あなたが現れた。偶然ではありません。わたしが探していたのは七代目、あなたなんです」  
気持ち悪いことを言いやがる、と團十郎は腕を払った。

「女か、おめえは。惚れた腫れたの話じゃねえんだ。男に探してもらったって、嬉しくも何ともねえよ」

暮れ六つ（午後六時頃）の鐘が鳴った。いつの間にか陽が落ち、辺りは真っ暗になっている。

鶴松が杉の木の左側を指さした。十町（約四二〇メートル）ほど先に、大きな寺があった。

「神田寛永寺開山堂です」

知ってるよ、と團十郎はうなずいた。開山堂は徳川歴代將軍の靈れい廟びやうがある寛永寺の伽藍がらんの一部である。

間もなくです、と鶴松が視線を向けた。その先に目をやると、本堂から数人の僧侶が出てきた。

「暮れ六つの鐘が鳴ると、住職が開山堂の慈眼大師じげんだいしのために経をあげるのです」

信心深くて結構なこった、と團十郎はうなずいた。

境内を歩いているのは五人の僧侶である。全員袈裟けさを着て、頭を

青々と剃っている。

先頭にいるのは高齢の住職だったが、順番があるのだろう。最後に  
尾についているのは、三十代半ばの僧であった。

「あれは法良ほうりょうという名の僧侶です」

鶴松が指さしたが、團十郎は生返事をしただけだった。それどころ  
ではない。何度も目をこすったが、間違いなかった。

おい、と鶴松の肘を掴んだ。

「どうしてあそこに俺がいる？」

團十郎は総髪ていぱつだが、法良は剃髪ていぱつしている。團十郎が着ているのは  
古着というのもおこがましいほどの襦袢ほろだったが、法良は上等な袈  
裟姿である。だが、その顔は瓜二つと言っているほどそっくりだっ  
た。

「一体どうなってるんだ？」

南蛮なんぼんでは、世間に自分と良く似た面相を持つ者が三人いるという  
言い伝えがあるそうです、と鶴松がおかしそうに笑った。

「どうです、自分の目で見ても信じられないほど似ているでしょう」  
気味が悪いくれえだ、と團十郎は自分の顔を手のひらでこすった。

「何だ、あいつは。俺と同じ顔なんて、どういう料簡だ？ 俺は七  
代目市川團十郎だぞ。坊主のくせに、生意気じゃねえか」

雨が強くなってきましたね、と鶴松が暗い空を見上げた。

「戻りましょう。あなたに風邪でもひかれましたら困ります」

「どうということなのか、じっくり聞かせてもらうからな」

團十郎は来た道を駆け戻った。泥が大きく跳ね、顔にへばりついたが、構ってはいられなかった。

七

蝸牛長屋に戻ると、お葉ともう一人、初老の男がそこにいた。体は小さいが、顔は團十郎より大きい。福々しい顔に、何とも言えない愛嬌あいきょうがあった。

お葉に渡された手拭いで肩の辺りを拭いていた鶴松が、家主ですと言った。どっかで見た面つらだ、と團十郎は犬のように頭を振って、雨の滴しずくを飛ばした。

そりやねえだろ七代目、と初老の男が黄色い歯を剥き出しにして笑った。

「哀しいことを言うじゃねえか、おいらのことを忘れちゃったのか

い？ 立川談志たてかわだんしだよ」

宇治新口師匠か、と團十郎は膝を打った。

「こんなところで何してやがる。あんたは弟子に三代目立川談志の名跡みょうせきを譲って、隠居の身になったと聞いてるぜ」

好きで隠居なんかしねえよ、と談志が憂鬱そうな表情になった。  
五十代半ばのはずだが、いきなり十も老けたようだった。

「去年、水野忠邦の馬鹿野郎が江戸中の寄席よせを潰しただろ？ 二百軒あつた寄席が、今じゃたつたの十五軒だ。御改革だか何だか知らねえが、鳥居の蝮まむしとくつついて、嘶家はなしかを目の敵かたきにしていたのは、最初っからわかつてたさ。首を切られる前に、てめえで高座から降りたんだよ。七代目みてえに手鎖てくさりになつた揚げ句、江戸から所払いにされたくなかつたからね」

宇治新口こと二代目立川談志は、名人と謳うたわれた三笑亭可楽さんしやうていからくの弟子である。高弟の「可楽十哲」の一人で、怪談嘶せを得意にしていたが、天保十二年（一八四一）、五十三歳の時に高座を降り、その後は世間から姿を消していた。

團十郎は寄席好きで、若い頃は入り浸りになるほど通っていたが、談志の落語というより、御政道ごせいどうへの皮肉や悪口雑言を笑いに紛らわして枕で語るところが好みだった。時には毒が過ぎることもあったが、笑いに変えてしまうのは談志が持つ芸の力だろう。

「すまねえな、忘れちまつたわけじゃねえんだが」  
仕方ねえさ、と談志が頭に手を当てた。

「この一年ほどで、すっかり薄くなつちまつたからな。七代目も寄席どころじゃなかつただろう。いろいろ大変だつたね」

師匠ほどじゃねえ、と團十郎は苦笑した。談志が高座を降りてから、顔を見ることはなかったが、一年で人はここまで老けるのだからかと思えるほど、年寄り臭くなっていた。

所作も老人そのものだ。思い出せなかったのも無理がないほどの変わり様である。

入ったらどうなの、とお葉が声をかけた。俺には手拭いの一枚も寄越さねえのかとぼやいたが、無視されただけである。仕方なく、そのまま長屋に入った。

えらく寒いなとつぶやくと、文句を言うなよと談志が笑い飛ばした。声だけは昔のままである。

「嘶家をやめちまったら、おいらには何の能もねえ。ちびちび溜めていた金で、ようやくこの蝸牛長屋を買った方がいいが、手入れも何もできやしねえよ。透き間風ぐらい我慢してくれ」

六畳ほどの狭い部屋に四人で座ると、お互いが風除けになって、少し寒さが和らいだ。

畳の上に大きな貧乏徳利どくりが置かれている。貧乏徳利とは通い徳利が正式な名称だが、酒を買う時は酒屋にこの徳利を持っていき、注いでもらう。容器代を節約することができるのが、貧乏徳利の由来であった。

爛かんしておいたよ、とお葉が言った。



「寒さしのぎには、酒でも飲むしかないだろ」

気が利いてるじゃねえか、と團十郎は猪口ちよこに酒を注いで勢いよく飲んだが、あまりの不味さに嘔むせて吐き出してしまった。ほとんど酔と変わらない味である。

「何だ、こいつは？ どの安酒だ？」

こんなものですよ、と鶴松が猪口をなめるようにしてひと口飲んだ。それだけで顔が真っ赤になった。

「七代目は口が肥えてるから、合わないかもしれませんが、酔うことはできます。それで良しとしてください」

そういうこった、と談志が徳利を抱え込んだ。酒好きなのは、團十郎もよく知っている。

「あんたは飲まねえのか」

徳利の首を向けたが、お葉は顔をしかめるだけだった。別にいいけどな、と團十郎は鼻をつまんで名ばかりの酒を喉に流し込んだ。

酒のあては味噌だけである。落ちぶれたもんだ、とつぶやきが漏れた。

江戸を離れ、上方を振り出しに東海道を下ってきたが、市川團十郎の看板を背負っているだけに、供きよう応も受けたし贅ぜい沢もできた。人気がなくても主役だから、それなりの扱いだったのである。

鳥居を殺すために江戸へ戻ってからは、目立つことができないか

ら飯や酒どころではなかったが、それまでのことを思うと貧乏長屋で安酒を呷る今の自分の姿が、情けなくてたまらなかった。

あんただけじゃねえよ、と慰めるように談志が肩に手を置いた。

「噺家も歌舞伎役者も皆同じさ。落魄らくはくって言葉は、こんな時のためにあるんだろうよ。おいらだって、つい何年か前までは、柳橋の芸者を総揚げして騒いでたんだぜ。それが今じゃこんなおんぼろ長屋の家主として糊口ここうを凌しのいでる。人間万事塞翁さいおうが馬つてのは本当だよ」  
それもこれも鳥居のせいだ、と團十郎は徳利に口をつけてそのまま飲んだ。いちいち猪口に注いでいては、酔よいも醒さめてしまう。

「老中の水野の野郎が改革を始めたはいいが、何でおれたちがこんな目に遭わなきゃならねえんだ？ 儉約結構、贅沢禁止も結構だが、役者や噺家を潰して何の得がある？」

鳥居つてのはそういう男よ、と談志が鼻をすすった。

「奴はまともに笑ったことがねえそうだ。笑うのは他人の不幸話だけらしい。性根が腐ってやがるぜ」

やっぱり殺すしかねえかと言った團十郎の手から、鶴松が徳利を取り上げた。

「何回言えばわかるんです？ わたしたちがするべきことは、ひとつしかありません」

魂を奪うと言うが、と團十郎は徳利を強引に取り戻した。

「おめえも妙なことばかり言いやがる。あれか、おめえも妖怪の仲間か？ 反魂はんこんの呪いでも唱えて、鳥居の魂を吸い取ろうってのか？」  
妖怪に魂なんてありませんよ、と鶴松が呂律ろれつの回らない舌で言った。

「鳥居には人の心がありません。生まれつきなのか、それとも鬼に魂を売ったのか、それはわかりませんがね。とにかく、これで全員揃いました。ここにいる四人は鳥居のために職を奪われ、すべてを失った者ばかり。恨みを晴らそうじゃありませんか」

四人、と團十郎は指を折った。

「おれと談志師匠、それにおめえはわかる。おれも師匠もそうだし、おめえに至っては改易を食らった浪人だ。だが、この女は違うだろう」

いきなり頭を叩かれて、團十郎は引つ繰り返った。お盆を手にしたお葉が、女って誰のことだい、と怒鳴った。

「お葉って呼びなつて、何度も言っただろ。仲間になるんなら、あんたが一番の新参者なんだ。それなりの礼儀つてもんがあるんじゃないのかい」

助けてくれ、と團十郎は鶴松の後ろに廻った。

紅葉狩もみじがりの更科姫さらしなか、こいつは。鬼女そのものじゃねえか」

許してあげてください、と鶴松がふらつく頭を下げた。

「あなたのことを話しておけばよかったんです。その暇もなかった  
と言え、その通りなんです」

「いったい何なんだ、と團十郎は座り直した。

「この女は……違う、悪かった。ええと、お葉さんも鳥居に恨みがある  
つてののか？ なるほど、女義太夫おんなぎだゆうでもやってたんだな？ これ  
だけの美人だ、人気もあっただろう。鳥居にしてみりや、潰し甲斐  
があったかもしれねえな」

「違います、とお葉を座らせた鶴松が部屋の隅に積まれていた草紙  
に手を伸ばした。『偽紫 田舎源氏』と表紙に題がある。

こいつがどうした、と團十郎は胡座あぐらをかいた。

「俺だって本ぐらい読む。こいつも読んだが、面白かったぜ。紫式  
部の源氏物語げんじものがたりのもじりなんだろうが、要は大奥の話だよな。こいつ  
は『玉櫛』たまぐしか？ 第三十四編ね……まだ続きがあったはずだ。持つ  
てるなら貸してくれ。まだ読んでねえんだ」

團十郎は読書を好んだが、歌舞伎役者として当然のことであった。  
歌舞伎の演目は、時代物と世話物に分けることができる。時代物  
とは江戸時代以前の史実を江戸期に移し替えて描いた作品、もしくは  
江戸時代に起きた事件を過去を舞台に置き換えて演じる作品であ  
る。「義経千本桜」よしつねせんぼんざくら「仮名手本忠臣蔵」か な で ほんちゆうしんくらなどがよく知られている。

世話物とは江戸時代の町人の生活を描いたもので、代表的な作者

の一人、鶴屋南北つるやなんぼくが書き下ろした「天竺徳兵衛韓嘶てんじくとくべ えいごくばなし」「東海道四谷とうかいどうよつや怪談かいだん」が有名である。

ただし、歌舞伎の世界では、人形浄瑠璃や能、狂言の演目を脚色した作品の方が圧倒的に多い。種本は多数あったが、歌舞伎向けの作品は少なく、しかもほとんどが過去に上演されていた。

現代では伝統芸能の側面が強いが、江戸時代における歌舞伎は創性の高い新作が待ち望まれていた。演目を決めるのは主役を張る役者で、團十郎もその一人である。

團十郎自身、新作には意欲的だったが、筋立てまで考えるのは手に余った。読書を好んだのは、原作探しという意味合いもあった。生来の性格に加え、稼業柄本を読むことが必要だったのである。

「柳亭種彦りゅうていしゅへんもえらい目に遭ったよな」

團十郎は著者名に目をやった。天保の改革によって規制を受けたのは歌舞伎役者、嘶家よみほんだけではない。読本作家も同じである。

『偽紫田舎源氏』の作者、柳亭種彦は人情物の作家だったが、書の内容が軽佻浮薄けいちょうふはくとされ、著書は発禁処分となり、譴責けんせきを受け筆を折らざるを得なくなった。天保十三年（一八四二）、六十歳で不遇のまま没している。

「下品だ何だ、言い掛かりをつけられて廃業しちゃったが、残念なこった。こんだけ世知辛い世の中だぜ。本を読む時ぐらい、笑いて

えじゃねえか。もつとも、鳥居が嫌うのはわからなくもねえ。野郎は学者だから、不真面目なことを書く奴が大嫌いなんだろう」

何て言い草だい、とお葉が畳を叩いた。

「真面目なことを真面目に書くのは、どんな馬鹿にだってできるじゃないか。真面目なものを不真面目に書くために、ただだけ苦労してると思ってるんだい？ こっちは命懸けでやってるんだ。そんなこともわからないようじゃ、あんたも鳥居と変わんないよ」

怒ることはねえだろうと言った團十郎に、そりや怒るさ、と談志が笑い声を上げた。

「ご本人の目の前で、不真面目呼ばわりされたんじや、誰だって怒るだろうよ」

「ご本人？」

お葉さんは柳亭種彦の娘さんです、と鶴松が鬚を何度も掻き巻くようにした。酔いが回っているようだ。

「柳亭種彦は、高屋彦四郎たかやひこしろうという旗本の筆名です」

貧乏旗本だよ、とお葉が自嘲するじちようように笑った。

「食禄二百俵しよくにひゃくたわひょう 扶持さしなんて、旗本としては下の下だね。とても食っていけないから、読本を書くようになった。娘のあたしから見ても、変な人だったよ。本当は学者になりたかったんだろうね。凝り性で、調べ物ばかりして、筆が進まないったらありやしない。遅筆堂なん

て呼ばれてたけど、そりゃそうでしょうって」

見かねたお葉ちゃんが柳亭種彦の名前で書いたのが『偽紫田舎源氏』だよ、と談志が團十郎の手から読本を取り上げた。

「あれは十年ほど前だったかね。まだ十歳とおになったかならないか、それぐらいだったんじゃないかな」

お父つつあんより、あたしの方が筆は速かったからね、とお葉が得意そうに言った。

「あの人は調べ物が好きだったから、話の種はいくらでもあったんだ。最初はお父つつあんが言うことをあたしが書いていくだけだったけど、それより自分で書いた方が速いってわかってさ。あたし一人で書いたとは言わないよ。言ってみれば合作だね」

最初のうちはそうだったかもしれんが、と談志が目脂めやにをこそぎ取った。

「親父さんから聞いたよ。お葉ちゃんが十五の時には、もう頭から、けつまで、一人で書くようになったと言うじゃねえか。柳亭種彦の名前だけ貸して、あとは娘に稼いでもらうとも言ってたぜ」

ろくでなしだよ、とお葉が泣き笑いの顔になった。

「おかげでこっちは大忙しさ。『柑瓢かんひょう諸国物語』の時なんか、さあ書けやれ書けて、あんたそれでも父親かよって思ったよ。それじゃまるで版元じゃないかってね。いい迷惑だよ、二十歳はたちを過ぎても

嫁にも行けず、家のことも全部お前がやれって言われてさ……だけど、水野や鳥居のせいで、柳亭種彦の名前を捨てなきゃならなかった。ちっぽけな名前だけど、お父つつあんには大事だったんだろうね。気が抜けたまんま、死んじまったよ」

わかるぜ、と團十郎は徳利を差し出した。

「まあ、飲め。飲んで憂さを晴らすんだな。全部忘れるこった」

酒飲みは大嫌いだよ、とお葉が團十郎の手を打った。

「お父つつあんは何もすることがなくなつて、毎日毎晩酒ばかり飲んで……あれだけ浴びるように飲んでたら、水だって死んじまうだろうよ」

面白い面子を集めたな、と團十郎は鶴松に顔を向けた。

「なるほど、おめえの言う通りだ。ここにいる四人は、皆、鳥居に對して腹に一物手に荷物だ。おれたちは舞台や寄席を奪われ、お葉さんは親父さんを失い、おめえは武士という身分を無くしちゃまった。鳥居への恨みを晴らすためなら、何でもしてやろうって面々だ。しかも、失うものは何ひとつありやしねえ」

やつとわかつてもらえましたか、と鶴松が團十郎の猪口に酒を注いだ。肩が大きく揺れている。

「すべての始まりは、わたしがこの長屋に越してきたことでした。

養父は罪人となり、即日改易です。屋敷から追い出された貧乏浪人



が暮らせる長屋など、そうそうありません。伝つてを辿って、今にも崩れ落ちそうなこの蝸牛長屋にたどり着いたというわけです」

檻ぼろ樓で悪かったな、と談志がつぶやいた。大家に挨拶をした時、見覚えのある人だと思いました、と鶴松が二杯目の猪口を空にした。目が真っ赤になっている。

「歌舞伎だけではなく、落語も大好きでしたから、寄席にはよく通ったものです。二代目立川談志師匠ではありませんかと言うと、よくわかったなと大笑いされたあの日のことは忘れられません。それから毎晩のように、鳥居への恨みを言い合ったものです」

「それで？」

「師匠が柳亭種彦と親しかったこともあって、お葉さんと引き合わせてもらいました。わたしも鳥居のために父を亡くしていますが、とはいえ養父です。血が繋がっていないと思えばまだ諦めはつきませんが、お葉さんが奪われたのは実の父親。わたしや師匠とは訳が違います」

そうか、と團十郎はうなずいた。改めて姿を見ると、お葉の顔にはまだ幼さが残っている。強気な物言いは見せかけで、弱さを隠すために虚勢を張っているのがわかった。

「七代目はお葉さんを伝でんぼう法な娘だと思っうでしょうが、前と比べたら、よっぽどましというものです。あの頃は毎晩わたしと師匠で、夜通

し見張っていたんですよ。いつ首をくくるのかと、心配でしたからね」

こいつがかい、と指さした團十郎の腕をお葉がひねり上げた。

「こいつって誰のことだよ。あたしは犬猫じゃないんだよ？ お葉って呼びなつて、何回言えばわかるんだい？」

落ち着いてください、と鶴松が二人の間に入った。

「それから恨み言を繰り返すだけの日々が続きましたが、そんなことをしていてもどうにもなりません。物言わざるは腹膨るるわざなりと言いますが、恨み言は口にするだけでも腹が立ってくるものです。鳥居にひと泡吹かせてやらなきゃ気が済まないと師匠が言ったことで、どうすればいいのか考えるようになりました」

おいらは何も考えちゃいねえよ、と談志が手を振った。

「そういうのは向いてねえんだ。思案は若い二人に任せて、おいらはぶらぶらしてただけさ」

そんなことはありません、とお葉が座り直した。言葉遣いが改まっているのは、年長者に対する敬意の表れだろう。どこのお姫様かと思えるほど、上品な姿である。

三人で相談して策を立てました、と鶴松が猪口の酒をまずそうになめた。

「鳥居が陰富の胴元をしていたことは、養父が遺していた書状でわ

かっていましたし、どこで賭場を開いているのかも見当がつきませんでした。そこには百万両を超える大金が眠っています。それをいたただくというのが、わたしたちの狙いなのです」

話としては面白い、と團十郎は手枕でごろりと横になった。

「筋立ては見えてきたぜ。鳥居が陰富の賭場を開いているのは、南町奉行所だな？　そこに百万両を隠してるのか？」

そうです、とうなずいた鶴松が猪口を畳に置いた。どうかしてやる、と團十郎は懐の煙管きせるを取り出して口にくわえた。

「おめえが言ってるのは、夢物語だよ。頭のおかしい浪人と読本作家、それに噺家がない知恵を振り絞って考えたんだろうが、奉行所から百万両もの大金を盗み出すことなんか、できるわけねえだろう」

そうでしょうか、と鶴松がまばたきを繰り返した。頭がどうかしちまったのか、と團十郎は煙管に詰めた煙草に火をつけた。

「歌舞伎や落語、人情本は罪であって罪じゃねえ。名跡を奪われ、手鎖五十日の罰を受けても、それだけのこった。だがな、押し込みは重罪だし、百万両を盗み出したとなりやあ、極悪人だよ。磔はりつけごくもん獄門になったっておかしくねえ。しかも南町奉行所といえ、奴らの本丸だぞ？　押し入るどころか、入ることだつてできやしねえだろうよ。そんな下らねえ謀はかり事におれを巻き込むんじゃねえ。そいつはお門違いはかってもんで……おい、どうした」

鶴松の体がゆっくり背中から倒れ、そのまま動かなくなった。情けないねえ、と談志がつぶやいた。

「この人はからつきし酒に弱いんだ。一杯飲んだら、いつもこのさまさ。今日は二杯飲んだから、よほど気が張ってたんだろう。それにしても情けないったらありやしねえよ」

水でも汲んでこよう、と談志が腰を上げた。鶴松の額に手を当てていたお葉が、頭を持ち上げて自分の膝に載せた。

面白くもねえ、と團十郎は煙管きせるをくわえたまま煙を吐いた。

鶴松の寝顔を見つめているお葉の顔に、幸せそうな笑みが浮かんでいる。畜生、とつぶやいて煙管を強く噛んだ。

(あんな風に惚れられてみてえもんだ)

今まで、どれだけの数の女を抱いてきたか、自分でも覚えていない。いほどだが、この二人のようにすべてを預け合ったことは一度もない。

畜生、ともう一度呻うめいた時、水を入れた桶おけを抱えた談志が戻ってきた。

「七代目、今夜は夜通し飲もうじゃねえか。久しぶりに会ったんだ。積もる話もあるってもんだ」

つきあうぜ、と團十郎は座り直した。まったく、酒でも飲んでなけりや、やってられねえよ。  
(つづく)